

# 隔月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



前浜のとっておきの仲間たちと椿油絞り機（宮城県気仙沼市／詳しくは2頁へ）

## 特集

### 災害に向き合う住民たち

めんどくささを楽しみ地域に活気をもたらす<sup>2</sup>  
前浜おらほのとっておき（宮城県気仙沼市）

子育て世代の女性視点で、  
独自の防災対策を講じる<sup>5</sup>  
市名坂東町内会（宮城県仙台市泉区）

専門家に聞く地域づくりのヒント<sup>7</sup>  
淑徳大学 総合福祉学部 准教授 山下 興一郎さん

まじわる災害公営住宅<sup>43</sup> 8  
八雲区オープンカフェ（宮城県涌谷町）

東北の元気<sup>73</sup> 9  
一中仮設BAPPAダンサーズ（岩手県陸前高田市）

被災経験地からのレポート<sup>10</sup>  
広島発 住民自らが地区災害ボランティアセンターを運営

まじわる災害公営住宅<sup>44</sup> 12  
一般社団法人チーム王冠（宮城県石巻市）

東北の元気<sup>74</sup> 13  
お茶の間学習（宮城県仙台市泉区）

どこでもサロン<sup>22</sup> 14  
とかの女子会（高知県佐川町）

支援員インタビュー<sup>1</sup> 15  
阿部若子さん（宮城県南三陸町）

宮城県サポートセンター支援事務所の活動日記<sup>1</sup> 16

# 災害に向き合う住民たち

東日本大震災を経験した住民たちが地域でつながり、豊かな暮らしを生み出している様子を、2地区の実践からご紹介します。住民の「とっておき」を自慢し合うイベント「前浜おらほのとっておき」は、津波被害を乗り越えて再開しました。地域内外の多くの人を訪れる毎年恒例のイベントになっています。

市名坂東町内会は、既存の町内会から独立して生まれた女性役員の町内会です。女性の得意分野を活かした組織運営で、防災対策、コミュニティづくりを力を入れています。



「前浜おらほのとっておき」に集った皆さん

## めんどくささを楽しみ 地域に活気をもたらす

前浜おらほのとっておき（宮城県気仙沼市）

ライター：熊谷智美

気仙沼市本吉町の前浜地域で、毎年春「前浜おらほのとっておき」というイベントが開催されている。2019年は3月30、31日の2日間開催。会場の前浜マリンセンターには、地域の人たちの自作の工芸品や手芸品、古い道具、写真などの「とっておき」が展示され、地域住民だけでなく、地域外からも多くの人が訪れた。

### きっかけは写真展

99年12月、「前浜の20世紀展」という写真展が開催された。各家にあった古い写真を展示したこのイベントには

地域の人が多く集まった。過ぎた日を振り返り、「あの人のおじいさんだね」「あそこの家のおっぴさん（ひいおじいさん）じゃないかな」など、なつかしい人たちや風景に大いに盛りあがったという。

その懇親会で、「前浜を再発見して地域を盛りあげよう」「仕事が暇な時期に面白いことをやらないか」という話が出た。

前浜地域では行事や催しがあると反省会や懇親会と称する飲み会がある。飲み会の席では、さまざまなおしゃべりが出され、「おもしろそうだ」となれば実現に向けて動き出す。特



震災の2年前に住民総出で避難路を整備した



「おらほのとおき」では手づくりの作品も展示される



「おらほのとおき」で展示された震災前の「ふるさとまつり」の写真



団体所在地

「おらほのとおき」は、02年に有志主催で第1回の「前浜おらほのとおき」が開催された。出展品は遠洋漁業の航海中に製作された工芸品もあれば、古くから使っている道具などバラエティに富んでいて、過去には家系図の巻物が

くっておきを  
披露して自慢しあう

徴的なのは、できない理由を見つけて実施しないのではなく、実現させる方法を前向きに話し合うことだ。

展示されたこともあった。ジャンルを問わずくっておきを自慢しあおうというのが趣旨だ。とはいえ、最初から多くの出品があったわけではない。「こんなものを出してもいいのだろうか」とためらう人も多かったそうだ。一般社団法人おらほのとおき代表の畠山幸治さんは、「当初は控えめな人が多かったのですが、お茶飲み仲間が出展しているのを見ると、自分も出してみようという気持ちになるように、開催中に持

住民同士のつながり

前浜地域の自治組織

ち込まれることもありましたが」と話す。そのため、搬入時間は前日に定めているものの、持ち込みがあればその都度展示するという。展示だけでなく、餅つきや椿油絞りなど、期間中には多彩な体験プログラムや講演会が用意されている。どの時間に訪れても、気軽に楽しむことができたり、興味深く参加できるのも特色の一つだ。

は前浜地区振興会と天ヶ沢地区振興会があり、この二つを合わせた前浜地域振興会がある。地域振興会の会長は各地区振興会の会長が交代で行うことになっている。「おらほのとおき」は有志<sup>※</sup>による主催だが、地域振興会が主催する行事も多い。東日本大震災の前には「ふるさとまつり」という運動会と芸能大会を合わせたような恒例行事もあった。避難訓練や防災訓練も毎年1回行われてきた。東日本大震災の2

※ 2015年10月に「一般社団法人前浜おらほのとおき」として法人化



年前には、津波を想定して浜からの避難ルートを地域住民総出で整備するという行事も行われていた。

### 自治会館の流出と再建

「おらほのとおき」の会場でもあった旧自治会館「前浜マリセンター」は、東日本大震災の津波によって流出した。もともとコミュニティ活動が盛んだったこともあり、住民が集まれる場所がほしいという声が避難所などで聞かれた。そこに支援団体からの義捐金提供の話が届き、住民主体でセンターを再建することになった。事前に全戸にアンケート調査を行い、条件付きを含め約98%がセンターの建設を希望する

という回答を得てからのスタートだった。

建設委員会の会議は11年10月1日の初回以降、落成式前の13年9月まで、委員のほかにボランティア団体や建築の専門家、地域住民をまじえて30回も行われた。

センターの建設に使われている木材の一部は、前浜で伐り出したものだ。木を伐り出す作業から、作業場づくり、床板貼り、漆喰壁塗りなど、多くの段階に地域住民が参加した。落成式前の掃除には85人もの住民が参加したほか、子どもたちも壁の金具を塗装するなど、それぞれができる作業を行った。

こうして前浜地域の住民にとって、まさに自分たちのセンターである「前浜マリセンター」が13年9月に完成した。

### 受け継いできた絆と新たな仲間

「めんどうくささを楽しんでるんだよ」とは、「おらほのとおき」会場で幾度も耳にしたフレーズだ。そんな前浜地域に魅力を感じる人も多く、地域以外にも仲間が増えていく。

「コミュニティづくりは一朝一夕でできるものではない」「地域で代々受け継いできたものがあつてこそ」「仲間が集まって協力し合うことで、難しいことも実現できる」と島山さんや前浜地域振興会の菊地新悦会長は話す。めんどうに思えるようなことにも丁寧に取り組み、楽しみに変えていく前浜地域の人たち。その活動は、今後さまざまな形で展開されていきそうだ。

### ポイント

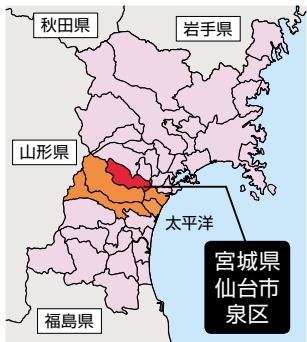
- ジャンルを問わず、自分たちの“とおき”を持ち寄り、自慢しあう年一回のイベント。
- 震災で活動拠点を失うも、住民自身が話しあいや建設に携わって、新たな拠点を完成させた。
- できない理由を探すより、実現させる方法を前向きに話しあう。行事後の飲み会はアイデアを出しあう場だ。

**DATA** 一般社団法人前浜おらほのとおき

宮城県気仙沼市本吉町田の沢53番地1



この日は就学を祝う「入学オメデトウ会」を集会所で開催。手づくりの芋煮を前に「いただきます」



## 子育て世代の女性視点で、独自の防災対策を講じる

市名坂東町内会（宮城県仙台市泉区）

市名坂東町内会は、既存の町内会から独立して生まれた、女性役員の町内会だ。

国道4号線仙台バイパス東部の新興住宅街、市名坂東地区には186世帯が暮らす（2019年4月現在）。もとは、バイパスの東西で一つの町内会だったが、防災対策など自分たちの思いにあった町内会をつくりたいと、2007年に独立した。

**ゼロからのスタートは「楽しかった」**

準備委員会をつくって半年後に独立。若い世帯が多く、男性は日中仕事に出ていたため、女性だけの役員となった。当時を振り返り、会長の草貴子さんは「活動資金がなく、役員を選ぶにもどんな人が住んでいるかわからなかった。ゼロから始めるたいへんさもあったが、楽しかった」と語る。町内には集会所がな

く、全戸に意向調査を行うと過半数を超える希望があり、建設を決めた。費用は、市の助成金と住民の寄付金、町内会費の積み立てのほか、不足分は銀行のローンを組んで賄った。地域の人たちと建設会社の人たちがアイデアを提供してくれ、防災協定を結ぶ曹洞宗宮城県宗務所が落成式を行ってくれるなど、「周りに恵まれた」（草さん）。そうしてできた集会所は、オール電化で、備蓄倉庫に食料品や日用品を保管するなど防災対策に万全を期した。

**震災時に集会所が避難所として機能**

集会所が完成した半年後に、東日本大震災が発生。約100人が集会所に避難した。3月11日から20日まで開放し、町内会未加盟の住民も受け入れた。

11日、草さんはガス漏れや道路陥没がないか町内を巡回。集会所では備

蓄していたアルファ米や飲料水を役員が提供した。夜には消防署分団が身守りに来てくれた。翌日から、草さんたちはリアカーで指定避難所から支援物資を運んだ。3日後には電気が復旧し、住民たちで持ち寄った食材を調理できるようになった。

子どもたちは、給水や支援物資の情報が書かれた紙をもって各家庭に知らせる役目を担った。避難した大学生と高校生は、小学生の勉強を見てくれた。閉所日には、つながりの安心感からか、緊張の糸が切れてか、「帰りたくない」と泣く子どもいた。



集会所の備蓄倉庫には懐中電灯や軍手、紙皿、なべ、卓上コンロなどが常備

### 日頃からのコミュニティづくりを意識

震災があり、日頃のコミュニティのたいせつさが意識された。「震災時に『あそこでパンを売っているよ』と声をかけてくれた人がいた。人と話すことで安心した」(副会長の今泉佳代さん)。「防災はいろんなものを備えるより、つながりが大事」(草さん)。

避難した若い母親や幼児は、初対面の関係も多かった。その時の経験から、母子の交流サロン「ずんだっこ」(本紙67号参照)を集会所で始めた。運営する役員の永澤美保子さんは「母親同士で顔をあわせて、情報交換できる。子どもも友だ



男性陣も屋台などで活躍した秋祭りの写真

ちの輪が広がる」と意義を語る。

町内会は、毎年、防災訓練と秋祭りを同日開催する。昨年は、大声を出し、身近なものを使って救助を求める訓練を行った。秋祭りでは、東北の郷土料理を食べ比べる3種の鍋と無料のビールが恒例だ。そこには、「食を通じて住民の交流を図りたい」という町内会の願いもある。

### 女性視点で組織運営

備蓄倉庫には、先のがったお玉がおかれています。そのほうが紙コップに入れやすいからだ。やかんは、注ぐ時の負担を考えて適度な大きさになっている。マスクは、



市名坂東町内会  
左から永澤美保子さん、草貴子さん、今泉佳代さん

顔が洗えない時用でもあ。このように、役員が全員女性とあつて、女性の目線や生活の知恵が町内会運営に生かされている。「女性視点で組織運営に携わるのが大事。子育てや若いお母さんのフォローといった得意分野を活かせたら」と草さん。

町内会として所属する市名坂小学校区避難所運営委員会に、「女性コーデイネーター」の設置を草さんたちは提案し、採択された。災害時に住民の相談に乗って、女性・母親目線でトラブルを解消する役職で、平時からさまざまな場面を想定してトレーニングを行う。町内会のモットーは「無理はしない。身の丈



集会所に貼られた「防災便利マップ」。震災の教訓をもとに、近隣のコンビニエンスストアやガソリンスタンドの所在地や連絡先をまとめた

にあつたオリジナルティのある町内会をつくること」。草さんは日頃から「私たちはプロじゃない。家庭が第一」と口にする。家事や育児の傍ら活動する役員は「気持ち楽になる」と負担を感じずに済んでいる。

### 震災を風化させない

震災から8年が経ち、震災を経験していない転入者も増えた。

草さんは、避難所運営委員会の事務局長として、市名坂小学校で毎年防災講話を開く。震災の様子や行政の防災対策、避難所や運営委員会の意義を説明し、「守られる側から守る側になるんだよ」と児童に教えている。防災は、伝えていくことでもある。新しいふるさとで、生きいき活動する大人たちの背中を見て、言葉にふれて、子どもたちは育っている。

田

### ポイント

- 防災機能を有した集会所が、震災時に避難所として役立った。
- 防災には、日頃からの住民間のつながりや情報共有がたいせつ。サロン活動や食を通じて住民の交流を促進。
- 女性役員が、育児や女性のケアなど得意分野を活かして自治会運営。

DATA ずんだっこ 毎週木曜日 午前10:00～12:00

## 専門家に聞く地域づくりのヒント

# そこに住み続けるための「コミュニティづくり」の法則とは？

東日本大震災以降、東北に通い続けて「生まれ育った地域で、長く暮らした地域で暮らし続けたい」という声をよく聴きます。私のゼミにも、「地元に戻って地域づくりをしたいから」という理由で入ってくる学生がいます。地域で代々引き継いできた文化、ご近所づきあい、空気、山、海など、その地域社会のなかで良くも悪くも私たちは暮らし続けてきたということからくる必然なのだろうと思います。では、災害により失ったものも多いなかで、どのようにしてコミュニティを再生していくのでしょうか？

### 1. とともに汗をかく地域づくり

できることから始める。おもしろそうなこと、できそうなことから取り組む。できないんじゃないかと悲観しすぎない。解決を急がず、とことん話し合い、時間をかける。ちょっとましな状態を目指し、その変化をよろこびあう。行事や催しのあとには振り返り（「食事会、飲み会」）を欠かさない。次は何をしようかと話を半歩進める。一人に負担がかかるような分担はし

淑徳大学 総合福祉学部 准教授

## 山下 興一郎

（やました・こういちろう）さん



全国社会福祉協議会に21年間勤務（1992年～）し、地域福祉、保育、介護、人材、政策にかかわり広報室長となり退職。その後、淑徳大学（2013年～）に奉職。東日本大震災では岩手県を中心に生活支援相談員のスーパーバイザーなどを現在も担う。大学のほか、市区町村社協のスーパーバイザー、千葉市社会福祉審議会地域福祉専門分科会長など自治体の委員を歴任。専門は地域福祉、権利擁護。

ない。皆で笑う。誰もがなんらかの役割があり、必要とされる地域社会をつくるのがコミュニティづくりなのではないでしょうか。

### 2. 生活者の視点を重視した地域づくり

災害支援において女性の視点を確実に入れていこうというのは、避難所運営委員会のマニュアルなどでも全国的に指摘されているものです。私も、千葉市防災会議男女共同参画の視点を取り入れる部会長として、女性、妊娠期を含めた子育て家庭、障がい、認知症や介護、外国籍、LGBTなどに配慮した議論を行っています。誰もがそこに居心地の良さを感じることでできる視点は、多様性と包摂という視点を重視することです。そうした意味で、地域社会の日常を支えていた女性・子育て女性の視点が災害時に大いに役立つのは、平時にそうした視点と行動があるからにほかなりません。地域社会のなかで誰もが「守られる側から守る側になる」という視点が体感できる地域づくりはとてもしなやかです。



# 「あたたかく、オープンな場所に」。

## 集会所を活用して、 災害公営住宅と近隣の住民が交流

八雲区オープンカフェ  
(宮城県涌谷町)

まじわる！  
集団移転 &  
災害公営住宅  
第43回



区長(中央)と自治会長(左)と笑いまじえながら話し合う参加者たち

涌谷町渋江八雲区の災害公営住宅「渋江住宅」(長屋建てと戸建て計28戸)の集会所では、「八雲区オープンカフェ」が開かれている。毎月1回第一月曜日の午前10時から午後3時まで、渋江住宅と近隣の住民約15人が、手芸やカラオケ、グラウンドゴルフなどの活動を楽しんでいる。主催は、渋江住宅の住

民と既存の住民で構成される八雲区自治会(役員17人)。県の「地域コミュニティ再生支援事業」の補助金を受け、参加費は無料だ。涌谷町社会福祉協議会も運営への助言や脳トレの講師などで協力する。

今年4月の開催日に伺った。午前中は、しおりづくり挑戦。参加者は特技を活かして「先生役」も担い合い、この日も一人が周囲に手順を教えていた。並行して、参加者と役員とでカレーづくり。お昼には和気あいあいと食卓を囲んだ。午後からは、お茶飲みやカラオケをして、和やかな時間を過ごした。

祖母の佐々木恵子さんと参加した孫の心海さんは、「一緒にしおりをつくって、カレーを食べて、楽しかった」と笑顔を見せた。石巻市で被災した女性も、「ここに来るようになってお知り合いが増えた。とても楽しい場」とにこやかに語った。



リボンやちりめんを使って、しおりづくり

同住宅住民の千葉博之さんは、「同じように苦労してきた人がいる。こういう会が必要」と意義を話した。

八雲区長の宮内建次さんと自治会長の伊藤幸雄さんも顔を見せた。この場で、新任の民生・児童委員を紹介し、消耗品の購入や福祉推進員の見守りなどについて参加者と意見を交わした。

「災害時に住民台帳はもつていけない。隣に誰がいるかわからないと、どうしようもない」と区長は、平時からこういう場に出て話し合いたいという話を聞いた。

2018年4月からカフェを始めたのも、集会所を有効活用して、

渋江住宅や近隣の住民間のコミュニティ活性化を図るためだった。「人口が減り、助け合わないと生きていけない時代になる」と会長の伊藤さん。

役員で地元で長く暮らす宮本ツヤ子さんは、「被災した人の心の痛みは計り知れない。話を聞いていけると何かできないかという思いになる。一緒に活動をするなかで、昔からいたように地域に溶け込んでいっていただけたら」と慮る。

渋江住宅住民の首藤洋子さんは、同じ福祉推進員の宮本さんに誘われて役員になり、得意のグラウンドゴルフの指導などで活躍。「皆で仲良くワイワイガヤガヤと楽しく過ごせたらいいなと思います」。

副会長の佐々木富貴代さんは、「他地区の災害公営住宅の人も呼んで、年に一回でも交流を図るといいのでは。人も自分も楽しんで、もっと広げていけたら」と願いを込めた。田



## 一中仮設

## BAPPAダンサーズ

「Facebook 第一中学校仮設自治会」

陸前高田市立第一中学校グラウンドに建設された150戸の応急仮設住宅団地（通称、一中仮設）の入居者が、集会所の様々な活動を通じて集まったグループ。

73回目

市民リレー

## 東北の元気

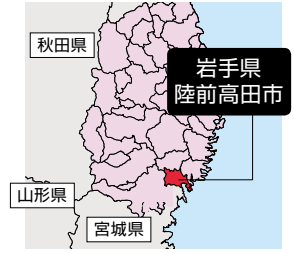
今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

踊りのリズムにのせ、  
広がる地域のつながり

◎一中仮設BAPPAダンサーズ（岩手県陸前高田市）

ライター：元持 幸子



真剣なステージ前のフォーメーションと振り付け確認



揃いの衣装で地域イベントのステージに登場

活動の夢が膨らむ  
BAPPAダンサーズの楽しい打ち合わせ

手づくりの椿ブローチをつけた揃いのかつぼう着姿で、はつらつとしたダンスを披露するのは、一中仮設BAPPAダンサーズの女性たちだ。陸前高田市の集会所や地域行事で、笑顔で楽しそうに踊る姿は、見ている側にも伝わり笑顔が広がっていく。平均年齢約79歳、メンバーは20人。

一中仮設集会所では教室や季節行事が開かれ、支援団体や訪問者と交流していた。参加していた、身体を動かすことが好きな人たちで、演舞サークルを結成。「踊りをやっていた人も多から、自然と体が動く」とメンバー。レパートリーは、青い山脈、高田音頭、ながいきサンバなど。運動後はお茶飲みをし、楽しい話や苦労話などを語り合う。

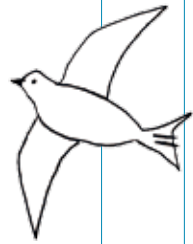
女優の大場久美子さん作詞の曲と踊りとの出会いから、「BAPPAダンサーズ」として活動を展開し、震災支援への感謝と元気になった姿を、より多くの人に発信できるようになった。「動画サイトに、私たちのダンスが掲載されているんです」とリーダーの菅野英子さん。ダンスは、訪問者やボラン

ティアとの交流や地域行事でも披露されるようになった。仮設団地が中学校グラウンドにあることから、学生に振り付けを教えて一緒に踊るなどダンスを通じてつながりは広がっていった。

2018年3月の仮設の閉鎖後もメンバーは連絡を取り、気にかけて合う。菅野さんは、同じ災害公営住宅に越してきた元一中仮設の住民にも声をかけ、つながりを継続。菅野さん宅では、ダンスの練習や新たなステージに向けた打ち合わせ、お茶飲みが行われている。

19年3月、同市コミュニティホールでのスローエアロビック健康の集いで、メンバーが再集結し、新メンバー3人も加わって踊りを披露した。「団地の集会所を利用し、団地の方々と交流を増やしながら、新たな地域でも笑い合える活動と、メンバー募集を続けていきたい」と菅野さんたちは語る。

笑いを大事にすることは、元気に若々しくいられる秘訣だと話すBAPPAダンサーズ。彼女たちのダンスは、見ている人を元気づけ、笑顔をこれからもつくり出していく。



## 広島発

# 住民自らが地区災害ボランティアセンターを運営

2018年6月28日から7月8日にかけての記録的な大雨により、1府10県に特別警報が出された「平成30年7月豪雨」。約14万6千人が暮らす広島県広島市安佐北区では、河川の氾濫や浸水、土砂災害が発生しましたが、特筆すべきは、地域住民が自主的に災害ボランティアセンター（以下、災害ボラセン）を運営し、地域復興の足がかりをつくったことです。同区は、「平成26年8月広島市豪雨」で一部の住宅地が土砂災害の被害を受け、区内の防災意識が高まっていました。平成30年7月豪雨では避難指示の解除を待つ間に、住民が助け合い、地域内外からボランティアを募って被災宅へ派遣し、泥かきや片付けなどを行う活動が、次々と6地区で始まりました。

その住民主体の取り組みは、安佐北区社会福祉協議会が2019年3月2日に開いた「福祉のまちづくり研修会公開講座」で報告され、有識者から評価を受けました。安佐北区民の取り組みの一部をご紹介します。

### 口田地区

#### 地元の民間企業なども協力

口田地区では、大雨で排水機場の排水能力が追いつかなくなり、浸水と土砂災害が発生。地区協議が中心となって、区内でいち早く災害ボラセンを立ち上げた。

地区社協の役員が、ボランティア受付名簿や派遣一覧などの様式を手



口田地区社会福祉協議会 会長  
伊藤昭善さん

探りで作成し、電話受付や支援助物の受付、飲み物の手配、総務全般を担った。民生・児童委員を中心とした地元の人々が、ボランティアの受付係を担当。朝のボランティアとのオリエンテーションは省略し、派遣先とボランティアとの調整役である町内会長が、訪れたボランティアをすぐ

に被災宅に案内して活動を始める体制とした。ボランティアに訪れる人の車の交通誘導係は町内会や企業の有志が担当、駐車場係は体育協会役員を中心に地域の人が担った。

地元の工場の駐車場を広く使用することができたため、ボランティアが多く訪れ、1日あたり千人以上を受け入れた日も。夏場で、また活動が9月20日まで長期に渡ったため、スタッフの体調管理には最も気を遣った。外部の支援団体から運営支援の申し出を受けたが、地名も知らない人と一緒に活動するのは無駄が多いと判断し、普段から関係性のない団体は断った。延べ8千人ものボランティアを受け入れ、そのうち3千人はリピーターだった。

そのほか、地元の民間企業などの協力を得て、飲料水や氷の提供、被災者へ無料入浴券の提供、おむすびの炊き出し、トイレの使用やお風呂の活用なども行い、地域の総合力で急性期を乗り越えた。

### 三田地区

#### 有線放送やマスコミ、SNSを活用

三田地区では、地元を流れる三篠川が氾濫し、7月6日から唯一の避難所を三田小学校体育館に



三田地区社会福祉協議会 事務局長  
溝口光明さん

開設。150人以上が避難し、そのうち3分の1が地域外からの避難者だった。その後、体育館が浸水の危険にさらされ、校舎2階に避難した。水に浸かって濡れている避難者には、毛布2枚を渡して我慢してもらおうとなく、ケガ人が来ても応急処置用の医薬品がなくて、居合わせた他校の校長の機転で差し入れてなんとか対応することができた。また、同地区は10キロにわたる横長の地域のため、小学校への道中が危険でたどり着けない人たちのために、地元の集会所を急きよ開けて避難する場面もあった。

は1日あたり266人のボランティアを受け入れ、区内10キロのボランティア送迎に苦労した。7月30日までに、延べ1050人以上のボランティアを派遣。

災害ボランティアの運営において、道路情報の収集、駐車場の確保、若手の運営スタッフの確保、連絡手段としての携帯電話の早期確保、運営マニュアルの作成がポイントになると考える。

### 高南地区 地区社協間の応援が力に

高南地区では三篠川みささの氾濫により、300人以上の避難者が小学校で一晩を過ごした。避難所の



高南地区社会福祉協議会  
会長 坂本哲郎さん

1か所が冠水したほか、県道や橋が通行止めとなり、自主防災組織は機能しなかった。

同地区社協は8日、事務所に集まることのできた10人ほどで、被災状況を確認し合った。災害ボランティアへのニーズが高くと予想し、ゼンリンの地図をコピーして、被災状況を書き込んだ。また、個人宅へ配る派遣要請書をつくって、自治会長45人に配付すると同時に、地区内でボランティアを募集し始めた。

翌日には、自治会長を介して派遣要請書が続々と集まってきたため、9月13日までは、要請のあった被災宅に地区内のボランティアを派遣。10日以降は、区社協を通じて地区外にボランティア募集を呼びかけ、週末ボランティアを受け入れた。8月までの2か月間、800人を超えるボランティアの協力を得て、被災宅の泥かきや片付けなど101件に対応した。

ピークは7月14〜16日の3連休で、1日あたり平均60人のボランティアが訪れた。その多くが、安佐北区内の12の地区社協に属する70歳代住民。地区社協間での応援に勇気づけられた。

課題として、「被災宅への派遣基準が明確でない」「どこまでの支援要請に対して、いつまでやるのかわからない」「災害ボランティア閉所後のアフターフォロー」などを挙げる。**小**

## 総括

県立広島大学保健福祉学部 人間福祉学科  
講師 手島 洋さん



### 顔の見える関係を活かした画期的な実践

普段の顔の見える関係を活かし、住民が地区ごとに災害ボランティアを立ち上げたのは画期的といえる。地域の団体が協働する「地区社協」という仕組みが、災害時にも活かされた実例だ。どの地区も、初めて災害ボランティアを開設したのにも関わらず、ゼロから体制づくりや書類の様式づくりをこなしており、あらためて個々の能力や特技が重なり合ったときの地域の力を実感する。課題を含めて、経験を蓄積することが、安佐北区民の力となる。



# まじわる！ 集団移転 & 災害公営住宅

第44回

## 在宅被災者・災害公営住宅 入居者間の交流も

一般社団法人チーム王冠  
(宮城県石巻市)



楽しくにぎわう車内

津波などにより被災した自宅で生活する在宅被災者の支援に震災直後から取り組む「一般社団法人チーム王冠」は、「お茶っこバス」と名付けたサロンバスでお茶会を開いている(本紙77号に関連記事)。拠点のある石巻市以外でも、県内や岩手県の沿岸市町

で住民の集いの場づくりをしていて、災害公営住宅入居者の交流の場として活用される地域もある。

震災の被害によって集会所がない地域などへお茶っこバスを走らせ、公園脇の空きスペースなどに駐車した状態で、住民をなかへ招き入れる。最後部のコの字型の座席などでテーブルを囲んで座ることができ、車内全体では10数人が一緒に過ごせる。お茶を飲みながら談笑したり、カラオケ設備を使って歌うこともできる。

お茶っこバスは、午前と午後で1か所ずつ、1か月間におよそ20か所で開催。各地域の住民とのつながりをもとに60地区以上を回る。特に沿岸部の在宅被災者は、被災者支援制度の助成で自宅の十分な修繕ができず、ご近所と家を行き来して気軽なお茶飲みをできない人や、自治会などを運営する人手不足によって行事ができ



駐車できれば、どこでも集える

ず、住民同士で顔を合わせる機会がないという人も多い。そのような地域でも、バスに臨時に集まれれば、住民間のつながりを保つことができる。「ここに来ておしゃべりしたり、情報交換するのが楽しみ」と、住民がバスでのお茶会前に電話で誘い合ったり、近くの公園にいる人に呼びかけてみたり、少しでも多くの人が輪に入れるよう働きかける。地域で見守りなどを行う、民生・児童委員が参加する地区もある。

災害公営住宅に入居しても、集会所が設置

されていないなかったり、設置されていても、管理の都合で気軽に使用できないために、なかなか住民同士で集まらない人たちもいることから、災害公営住宅入居者や高台移転者を対象としたお茶会も開いている。震災以前から周辺地域に住む人たちも一緒に親睦を深めたり、災害公営住宅入居者と在宅被災者のそれぞれの苦労を分かち合うことにもつながっている。

移転先の集会所が完成し、「これからは自分たちで集まれる。いままでありがとう」と住民から言われ、お茶っこバスの活動を終了した地区もある。代表理事の伊藤健哉さんは、「活動終了する地域が増えることに期待し、自分たちの役割を果たしていきたい」と語る。被災した人の状況に応じて住民の暮らしを応援する、活動開始当初からの視点でこれからも歩み続ける。**清**

DATA

## お茶の間学習

開催日：毎週火曜・木曜  
午後3時から5時30分  
参加費：月千円

74回目

市民リレー

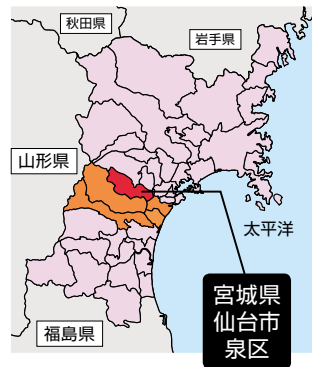
# 東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

今回は...

## 町内会が開く学習教室。 世代間交流も見据えて

◎お茶の間学習（宮城県仙台市泉区）



写真提供：鶴が丘一丁目町内会



イラストやCDも活用し、  
体を使って楽しく学べる英会話学習



18年8月に公園で行った「遊びと食の多世代交流」。  
大学生も入り、一緒に楽しんだ



集会所の隣に公園があり、  
宿題が早く終われば自由に遊べる

約1200世帯加盟の鶴が丘一丁目町内会では、町内会役員や元教員ら住民が、放課後に児童の勉強を見ている。週2回、集会所で開く「お茶の間学習」だ。

対象は鶴が丘小学校に通う町内外の小中学生。昨年度は約25人が利用した。元英語塾主宰者が英会話を教え、元教員や元保育士、元小児科の看護師ら町内在住の子どもと接するプロや仙台白百合女子大学生などが学校の宿題や復習を見る。

「宿題をやる習慣づくりが目標です。聞かれたら教え、一緒に考えていくようにしています」と元小学校教諭の山崎さんは、子どもの自主性を尊重する。子どもたちで教え合う姿も見られるようになった。

2年前から通う3年生の男の子は、「いろんなことを学べる」と話す。「家で宿題するより楽しい。友だちとも話せる」と4年生の女の子。宿題が終われば、公園で遊んだり、役員と将棋をしたりと自由に過ごす。上級生が下級生の面倒も見る。保護者は、「近くに学べるところがあってすごくいい。お友だちの輪も広がる。い

ろんな学年の人と接することもでき、交流の場としてもいい」と語る。

背景には、地域に塾がなく、学習の場へのニーズの高まりがあった。2016年9月に町内会役員・子ども会育成会役員らで、子どもの学習支援に向けた検討会を結成。鶴が丘小や近隣の大学生、児童センターとも話し合いを重ねた。小学生世帯にアンケートをとり、過半数の賛同を得て、17年4月にお茶の間学習を始めた。活動費は、立ちあげ時は日本財団の助成金を活用し、町内会からも支出。「住民が子どもを見守れる状況をつくれれば、働くお母さんも安心できる」（町内会副会長の森本修さん）と、大家族のように見守る場にもなっている。「子どもも安心して暮らせるまちにしたい」と会長の鶴谷民司さん。

お茶の間学習の子どもが町内会の行事や畑づくりに参加するなど、世代間交流の入り口にもなる。昨年度は、バーベキューや秋の落ち葉拾い、芋煮など、四季折々の行事を実施。学びや遊び、食を通じて、多世代で親睦を深めている。

# どろろでもサロン

第22回

自然なつながりと支え合いを生み出す



## 仲間と歩けば気持ちも前向き

とかの女子会 高知県佐川町

前号に続き、高知県佐川町の住民活動をお伝えする。

同町はウォーキングが盛ん。

小学校区ごとに住民が名所旧跡を巡るウォーキングマップを制作し、マップのコースを歩くイベントを定期的に開く。歩くのを日課にする人も多い。

「心も体もすっきりするわよ」と話すのは、同町斗賀野地区に住む渡辺絹子さん（73歳）。

仲間の女性10人前後（40〜70歳代）と毎晩一緒にウォーキングしている。「歩くサロンね」と言うので、同行してみた。

夜7時50分。地区の中心部にあるLPガス販売店の駐車場に、参加者が集合。8時ちょうどに出発し、列をなして山手のほうへ向かう。ぐんぐん坂をのぼる。頂上付近でいったん足を止めてストレッチ体操。再び歩き出すと今度は下り坂。大きな弧を描くアップダウンのコースを取って、出発地点へ戻る。約5キロ、1時間あまりの道中、体操のとき以外はずっとおしゃべりが続いていた。介護や子育て、健康などに関する悩みや不安を打ち明けたり、さまざまな生活情報を交換したり。

「歩いていると自然に言葉が出てくる」と仲間の一人、真辺佳代子さん（53歳）。「だからみんなと歩くのがとても楽しい。悩みを聞いてもらって『大丈夫よ』と言ってもらうだけでも心が軽くなるしね」。

日中はそれぞれ忙しく、歩くのは夜8〜9時頃がちょうどいい。高齢者宅を通り過ぎるときには、電気が点いているかどうかなど、異変の有無をさりげなく見ている。以前、シルバーカー（押し車）が畑に放置されていたのを発見し、持ち主の安否を確かめたこともあった。

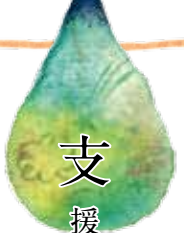
仲間のほとんどは、地区のボランティアグループ「とかの女子会」のメンバー。夜のウォーキングにこれほど集まるのも、会のつながりがあるからだ。

会は、渡辺さんら地区の女性有志が「面白いことをして地域を元気にしよう」と2014年に結成。現在は40〜80歳代の約30人で活動している。伝統の七夕祭りの復活・継続、敬老会の舞台公演、地域食堂や子ども食堂の運営支援、みそづくりを通じた住民交流のほか、郷土史家に案内を頼んで地区の

旧跡を訪ねる「歴史ウォーク」も行っている。

「二歩一歩進むのが大事。気持ちも前向きになる」と渡辺さん。地域づくりとウォーキング共通の極意だ。**木**





# 支援員インタビュー

1

宮城県南三陸町では、60戸以上の復興公営住宅の集会所に高齢者生活相談室を設け、L S A（ライフ・サポート・アドバイザー）が駐在している。L S Aは生活相談への対応のほか、高齢者や支援が必要になりそうな世帯の見守りや訪問活動、住民同士の交流のサポートなどを行っている。（聞き手・熊谷智美）

## — 支援員になったきっかけは？

阿部 震災で仕事を失い、職業訓練でヘルパー2級を取得しました。地元の復興に少しでもかかわりたいと考え、2012年4月から支援員として活動しています。

## — 戸倉復興住宅での活動はいつから？

阿部 入居が始まった16年3月から駐在しています。当初は住民の皆さんに信頼してもらえないよう、たわいのないことでも自然に会話をしよう心がけました。この復興公営住宅は高齢化率が50%を超えていることもあり、入居当初は電気がつかないとかお風呂にお湯をはれないなど設備についての問い合わせも多くありました。

## — スケジュールと主な役割は？

阿部 月曜から金曜は集会所で9時半から体操、そのあとにお茶会をしています。参加

社会福祉法人南三陸町社会福祉協議会  
町営戸倉復興住宅 L S A

# 阿部 若子さん



者は10数人ですが、台風でも雪の日でも集まってください。普段は相談室で住民の皆さんへの対応をしたり、気にかかるお宅に訪問することもあります。困難なケースは行政や地域包括支援センターなどの専門機関につなぐ場合もあります。また、月曜と木曜には、自立再建した別の団地の集会所に出張して体操やお茶飲みのサポートをしています。

## — 心がけていることは？

阿部 住民の皆さんのお話に丁寧な耳を傾けるようにしていますし、ふらっと相談室に立ち寄られる方との世間話もたいせつにしています。複数の人が集まる場が苦手な方もおられますが、そういう方がついていられたら安心です。住民同士のつながりには心を配っています。

## — 今後の抱負や目標は？

阿部 以前は体操やお茶会の準備や運営は私たち L S A が行っていました。いまでは参加者の皆さんが率先してされますし、私たちがいない土日自分たちでやってもらえます。また、「お勤めしているはずの人の車があるよ」「あの人、具合が悪いんじゃないかな」など、住民の皆さんがお互いに気にかけて合うことが増えてきました。南三陸町の L S A の今年度の目標は、「そつと寄り添い 共に歩もう 笑顔の輪」です。私も L S A が常駐しなくても住民同士で支え合い、助け合えるようなコミュニティづくりをサポートしていきたいです。



戸倉復興住宅の集会所のなかに相談室がある





気仙沼市安波山から一望する気仙沼湾

## 被災者支援の経験を生かした地域づくり

震災発生から8年。県内の災害公営住宅は内陸部も含めた21市町312地区に建設され、全1万5823戸の整備が完了した。一方で、応急仮設住宅の入居者は718人となり、ピーク時(123,630人)から大きく減少している(2019年3月11日現在)。

住まいの再建が進む一方、災害公営住宅では高齢独居者の割合が高く、経済面や健康面での問題を抱えている人、新しい地域になじめず孤立する人も多い。防災集団移転等で、あらたな地域づくりに奔走する自治会長の苦勞話もあちこちから聞こえてくる。また、在宅被災者や県外避難者が抱える生活課題など、対応すべきことは多い。

加えて、東日本大震災後におきた熊本地震や西日本豪雨などにおける、地域支え合いセンターと県支援事務所の設置についての相談を受ける機会も増えた。支援事務所に寄せられる相談は、個別の生活課題から地域づくりまで、年々幅広い内容になってきている。

各市町行政やサポートセンターは、いままで行っ

てきた「被災者支援」からそれぞれのオリジナリティを活かした「地域づくり」に切り替えていく重要な節目に来ている。そこで、支援事務所としていままで以上に力を入れたいのは、市町行政の庁内連携のサポートである。被災者生活支援の担当課、災害公営住宅などの管理担当課、そして自治会支援などの地域づくりの担当課など、各課の役割を整理し、支援の方向性を統一させていく必要がある。各課や支援関係者が集まる連携会議でのファシリテーションや研修の機会を活用し、現状認識を合わせ目標設定ができるようなサポートをしていきたい。

もちろんいままでどおり、CLCと連携した支援従事者研修や各地からの要望に応じた学びの場の提供、そして弁護士等専門家の派遣なども継続していく。各地の支援関係者の思いに耳を傾け、文字どおり心血を注いできた被災者支援の経験が、今後の地域づくりにしっかりと根付いていくようともに考え、取り組みを進めていきたい。(真壁さおり)

### ☆次号予告 特集「見守られ活動」

#### リニューアルのお知らせ

いつも本紙をお読みいただき、誠にありがとうございます。東日本大震災の被災者の暮らしを豊かにすることを目指し、2012年9月に創刊いたしました本紙は、住民同士の支え合い活動や被災者支援の取り組みなどを毎月ご紹介して参りました。震災発生から8年が経過するにあたり、当編集委員会では、本紙が一定の役割を果たしたと考え、2019年4月よりリニューアルすることといたしました。発行頻度を隔月(偶数月発行)にし、紙面の構成も変更させていただきます。

今後も被災地域の現状をお伝えし、日頃からの地域のつながりのたいせつさを発信して参りますので、引き続き、ご理解、ご支援のほど、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

(東北関東大震災・共同支援ネットワーク  
地域支え合い情報編集委員会)



あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!  
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737  
E-mail [joho@clc-japan.com](mailto:joho@clc-japan.com)

購読者を募集しています!

「隔月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか?

購読会員 年1,980円(年6回、送料込み)

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

◎お振込先

●ゆうちょ銀行振替口座

口座番号: 02260-9-46303

加入者名: 全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、

①お届け先の住所 と ②何号からの購読申込み  
を記入してください。